

親鸞仏教センター通信

2005.
March

第13号

2005年3月1日発行

発行者 本多 弘之

編集・発行 親鸞仏教センター(真宗大谷派)

〒113-0023 東京都文京区向丘 1-13-7

TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901

e-mail shinran-bc@tomo-net.or.jp

ホームページ <http://www.shinran-bc.tomo-net.or.jp>

現代生活への痛棒

親鸞仏教センター所長 本 多 弘 之

近代の文明生活の恩恵にすっかり馴染んで、われわれは不感症になっているのであるが、昨年(2004年)のような異変が次々に起こると、その危うさにあらためて気づかされる。殊に、真夏日の続いた猛暑には、日ごろのエネルギー消費のつけが、地球温暖化として現実化していることを実感させられた。そのうえ、度重なる台風の襲来は、太平洋上の温度が上がって大型の台風が発生しやすくなっていたというのであるから、これは一夏だけの異常ということでは済みそうにない。それに加えて新潟県中越地方の大震災であり、スマトラ島沖の地震にともなう津波の大災害である。

ゴミの処理問題とか、排気ガスの規制のこととか、あるいはエコロジーの運動とか、近年は地球規模の汚染が指摘され、これらに対して本気で関わらなければ、人類の未来はむろんのこと、いのちの連鎖としての生命態系そのもののさえ危ないことが警告され、危機の現実化が予測されている。

にもかかわらず、圧倒的な文明化への志向が反省されることもなく、その文明化をもたらす人間中心主義の考え方の根本的な批判には、耳を貸そうとしないのが現代生活者の心情である。それは近代の工業技術の進展と大量生産による安価な工業製品の入手が可能となり、大多数の都市生活者に便利でゆとりのある生活が恵まれているという感覚があるからであろう。

しかし、この比較的に安楽な生活手段に恵まれたことによって、与えられた時間や労働力は、結局、コンピューターを始めとする機械や技術に費やされなければならない、その仕事や生活からくるストレスは、便利さや豊かさをも灰色にしてしまうような「せわしなさ」となっているのではなかろうか。

この近代化の方向を求めてやまない人間の要求には、その根源に欲望の罪ということがある。個人的な欲望よりも深く、大衆として豊かさや便利さをいっしょに欲望することによって、この近代化そのものの罪が見えなくなっている。だから先進国とは、「尖鋭国(せんしんこく)」でもある。限りある地球の資源と自然に、謙虚に向かい合うためには、この人類的煩惱の炎を自覚する大切な契機として、これらの自然界の異変を心していただかなければならないのではないか。そして、現代生活の危うさを自覚的に問い直す必要があるのではないかと、痛切に感ずるのだが、いかがであろうか。

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土—^{じよく}濁世を超えて、濁世に立つ—」

南無阿弥陀仏

—本願自身がはたらき出る行為—

親鸞仏教センター所長 本多弘之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、その第32回（第32回のシンポジウムは、本紙12頁を参照ください）から第34回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。第33回と第34回は、「心業^{しんごう}功德」について、センター所長・本多弘之が問題提起を行い、有識者と一般参加者との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第31回の問題提起からその一部を紹介する。（越部良一）

■ 念々にいま

大変、難しい疑問をぶつけられたことがあります。それは、「大悲であり、無条件だと言うのなら、念仏も要らないではないか」と。「何も要らないではないか」と。そのとおりです。だけど、「何も要らない」と言われて、^{うなず}頷けるか。例えば、母子であれば、ニコッと笑っているだけでよいという、そういう関係があるかもしれない。でも、苦悩の衆生が大悲を感じ^め自覚めるというときに、何も無くては、たとえ大悲に救われているのだと頭で思ってみても、身が頷かない。

人間は、無条件ということを実感するために、何か一つの条件を^く潜ることが必要なのです。これは、なかなか面倒なことです。何か外に立てられた無限という形がないと、われわれはぶつかりようがない。ただ、無限の荒野に向かって立ったときの不安のようなもので、「自分がそこにあることでよいのだ」とは、とても気づけない。ただ、さまよっていくだけになってしまう。

「名前なんて要らないではないか」、あるいは

は「名を一回称えたら、もうあとは何も要らない、もうたすかっているのだ」と、そういう誤解も生じ得る。けれども、それは人間の傲慢性である。例えば、「食事は一遍食べればよい、腹いっぱい食べればそれでよいのだ」と言っていて、それで済むのか。人間は、時間を生きる存在だから、たちまち腹がへってくる。あんなに腹いっぱい食べたのに、次の日までたない。そういう人間が、一回称えて、そのあとずっとたすかるというようなことはできないのです。すぐにまた、愚かな考えが起こってくる。我執が復活してくるし、いっこうに治らない深い罪が、人間全体を包んでしまう。

だから、いつもいつも間違いが照らし出され、傲慢さが叩き伏せられて、本当に愚かな自分がいつも感じられるというはたらきをどこかにもたないと、存在自身の尊さを本当に感謝していただくという生活が、現実のなかに足を降ろすことはできないのです。言うならば、海岸の砂に字を書くように、何回書いても、海の水で消えてしまう。そこにまた字を書くように、「念仏生活」は、念々にいま、念々にいまとして、しかも一番やさしく、いつでも、どこでも、誰でもできる方法として与えられている最良の方法である。こういう生活が、本願をいただいていた歴史の^い頷きであったのだらうと思うのです。

■ 主語なき行為

念仏は「易^い行^{ぎょう}」である、ということが繰り返し言われる。しかし自分がなす行為が、たとえ易しくとも、「すごい行為なのだ、お前らの

行為より勝れているのだ、俺がその行為をするのだ」というふうに自己評価をすると、念仏で自分を誇りにするということですから、そういう念仏を、親鸞聖人は注意深く批判されるわけです。念仏を称えることにおいて、如来の願いを聞いていく。そのことを忘れると、行為を己が行為としてしまう。そうすると、何のことはない、他の行為をなすのと質は同じなのです。

その行為が如来の願いである。つまり、「^{いち}一如」のはたらきである。人間の我が行為ではないのだと領くための手がかり、「俺が、俺がという思いがまた立っているな、この俺が間違いなのだ」と、うながすための手がかりとして、「南無阿弥陀仏」という言葉があって、その言葉において我執が破られ、光の世界のはたらきを回復してくるのです。

そのための行為ですから、行為にして行為ではない。人間の行為ではなくて、人間を超えた如来の行為である。私の口をとおして発音するから「私の行為だ」と思った途端に、それは如来の行為ではなくなる。面倒な話です。だから、主語なくして起こる行為、本願自身がそこにはたらき出る行為、そういうふうに親鸞は「南無阿弥陀仏」を押さえられた。人間の思いで「どうにかしよう、ああしよう」という発想で何かをするのではないのだと。

だから、「^{なんしん}難信」なのです。信じ難い。われわれからすると、立派なことや難しいことをすれば、それはすぐにわかるし、目に見える。だけど、念仏するということは何の意味だと。だから、教えを聞いても聞いても、そういう疑いがなかなか晴れない。一番やさしい方法を選んだけれども、人間にとっては一番聞きにくい。なぜなら人間は、傲慢で、賢いと思いたいものですから。そして、難しい行為をなしてこそ価値があると思うものですから。

■ 大勢の求道者の伝統

理性からするとわからない。「なぜ名前を称えればよいのだ」と。いくら考えてみてもわからない。わからないのだけれども、大勢の求道

者が領き、自らもそのことを実践して、大悲本願をいただいて喜んで生き、喜んで死んでいった。そういう伝統のなかに、われわれは漸くにして、「ああ、南無阿弥陀仏という^{みな}御名が尊いのだな」ということを少しずつ領かされる。

「南無阿弥陀仏」という名の発音を聞くのは、自分に先立って、それをいただいた方が称えていることをとおして聞くのです。具体的に本願を信じ、念仏して生きている、そういう方々の発音をとおして聞こえてくる。そのことで、本当にこちらの暗い、濁世を生きる罪業深重の存在であるわれわれが、阿弥陀の御名が尊いものだということに領けるようになる。

われわれ愚かな凡夫が、本願を信じて念仏する。ちょっと見たら、愚か者が何か発音しているというだけのことにも見えるような行為をとおして、実は、一切衆生を救いたいという願いを、如来はどこまでも響かせていこうとされる。聞く側からすると、自分に先立って本願に触れてくださった方の、名を発音する声を聞いて——十方衆生はその声を聞いて——、また、自分も本願をいただく存在に漸く成っていくことができる。人をとおして、人を信頼して、名号が、大悲が、人間のうえに領かれていく。私のなかに、自分を破って、自分で作るわけではない「如」の声が響いてくる。言葉なき言葉が響いてくる。そして初めて、「ナンマンダブツ」がかたじけないということが起こってくる。そういうことだろうと思うのです。

(文責：親鸞仏教センター)

「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は公開で開催しています。どなたでも聴講(無料)いただけます。

記

日時：2005年3月14日(月)午後6時30分～9時
4月 休講します

5月13日(金)午後6時30分～9時
場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック
JR・地下鉄ともに「有楽町」駅より徒歩1分

— 現代と親鸞の研究会・第14回 —

日本の現状と宗教の可能性

— 超越性と現代の文学をめぐって —

文芸評論家 加藤典洋



加藤典洋氏

2004年6月25日、東京ガーデンパレス（文京区）において、明治学院大学教授で、文芸評論家の加藤典洋氏を迎え、「日本の現状と宗教の可能性—超越性と現代の文学をめぐって—」をテーマに「現代と親鸞の研究会」を開催した。

現代の宗教の課題は、「自力を介した超越的なものへの回路」とは別個の宗教原理を見いだすことにあるという話を、現代の文学が直面している問題をとおして、語っていただいた。ここにその一部を紹介する。

（本多雅人）

■ 現代の宗教の課題

1995年のオウム真理教の事件は、超越的なものへの人々の希求を大きく脱臼^{だつきゆう}させました。それ以来、宗教的なものは、世間では危険で胡散臭いものとなったと思います。しかしこれは、「現代の宗教」に先がないということではなく、オウム真理教的な宗教性^{たいじ}に対峙できる、別種の宗教性の原理を、どのように提示できるかが宗教界に問われたということだったと思います。

オウム真理教的な宗教性を、一言で「自力の努力」、つまり、精神修養とか修行によって超越性の経験へと自分をつなぐ企て、と要約することができます。この「自力の努力」というのはよくわかるし、見えやすい。それで若い人をひきつけたというところがあります。

これに対する原理のもっとも明確な形は、親

鸞の述べた「絶対他力」でしょう。私には、この「絶対他力」の宗教性に現在の困難を超える手がかりがあるという気がします。その場合の問題は、「他力の努力」というものが「自力の努力」にくらべ、見えにくいことでしょう。他力における超越性への努力というのは何であるのか。簡単に言えば、それは、何もしないこととどう違うのか。そのあたりのことをはっきりと示すことができ、「自力の努力」とは別種の「他力としての超越的なものへの回路」を示せば、一つの答えになるでしょうが、これが難しいのです。

オウム真理教の事件は、同時代の文学のなかにも、「骨折」のような経験として残っています。そして、非常に大きな影響を及ぼしています。そこで、ここではこの「他力の努力」に関して、文学作品がどんなことを考えさせるかを話してみます。

このことについて、『小説の未来』（朝日新聞社）に、「このオウムの事件の後、日本の文学と社会とに、ある萎縮が起こった」と書きました。「現世を否定する」、あるいは「彼方^{かなた}への欲望に身を委ねる」といった心の動きが、屈折し、萎縮して、同時代の文学の中で身を潜めるようになったということです。このような時代に超越性への希求、つまり宗教性への希求はどう生き延びられるか。「他力の努力」とは、修行とか空中浮遊とか出家とかを介さない、日常性を保持したままでの、あるいは日常性のなかでの、超越性への希求を意味します。この「修行」しない宗教性を、ここで超越性への希求と日常性の感覚の関係の再構築という観点から見

直すと、現代小説がいくつかのヒントを提示しています。

■ 他力の努力

—現代文学における「この問い」への応接の姿—

事件による萎縮のもっともはっきりした例は、よしもとばななさんでした。事件に先立つ彼女の長編『アムリタ』では、事故により主人公の人格が「半分」崩壊していることが、主人公に、超越的なことがらがふつうに受けとられることを通じて、日常的なものと共存することの力ぎになっていて、オウム的に「修行」するのでない宗教性とのふれあいの可能性が示されています。

超越性と日常性とは、たとえば「山に登る」オウム型宗教でははっきりと対極的なものとなり、「山から下りる」親鸞の妻帯肉食型の在家の宗教性では、共存の形をとります。『アムリタ』では、主人公が半分「壊れている」ことが、この共存を可能にする手がかりとなっています。

また、オウムの事件に触発された『アンダーグラウンド』を受けて書かれた村上春樹の小説『スプートニクの恋人』では、「彼方に行きたい」出家型の恋人と、いつも地上にとどまる在家型の「ぼく」との恋愛が描かれています。この恋人はギリシャの島で卒然として消えてしまうのですが、最終的に、「超越される」日常性は、「超越する」超越性と、どのように連帯できるのか、ということが、この小説のテーマへと育っていきます。

「自力の努力」というのは、わかりやすい。しかし「他力の努力」とは、身体の努力をしないことが心の努力になる、さらに心の努力をも断念することが他力への開眼になる、そういうことに気づくことです。このことを考えるのに、説得というのとは別種の回路を必要とします。文学は、説得するのではなくて、自分で迷うのです。そこにこの主題との親和性があると思います。

吉本隆明さんは、「横超」とは「如来と人間

のあいだの^{へだ}距^{しん}たりの自覚において一挙に跳び超される〈信〉^{きよう}衆の在り方」（『最後の親鸞』）だと言っています。私は、これを「日常性から離れずに超越すること」と言ってみたいのですが、これらの小説のなかに、いまいる場所からこの「他力」を介しての宗教性への回路へといったヒントのようなものが、現れていると思います。

たしかにそこにあるのは、答えではありません。小説には、問いをもって答えを求めるというのとは異なる、問いとの出会い、そして答えへのまなざしがあります。そういうものから、さきほどの「壊れ」の可能性、超越する者と超越されるものの連帯といった主題がつかまえてきている。そう考えると、これら小説の試みが「他力の努力」と無縁でない^{ゆえん}所以も、見えてくるでしょう。（文責：親鸞仏教センター）

※加藤典洋氏の問題提起と質疑は、『現代と親鸞』第8号（2005年6月1日号）に掲載予定です。

加藤 典洋（かとう のりひろ）文芸評論家、明治学院大学国際学部教授

1948年、山形県生まれ。東京大学文学部仏文科卒業。国立国会図書館勤務の後、明治学院大学国際学部教授。2005年4月から早稲田大学国際教養学部教授。専攻は現代日本文学。著書に『アメリカの影』（講談社学術文庫）、『敗戦後論』『日本という身体』『この時代の生き方』『テキストから遠く離れて』（以上、講談社）、『加藤典洋の発言』（全3巻、海鳥社）、『可能性としての戦後以後』『言語表現法講義』（以上、岩波書店）、『小説の未来』（朝日新聞社）など多数。また、『アンジャリ』第3号に「予定説と絶対他力」（親鸞仏教センター）を執筆いただいている。



「現代と親鸞の研究会」（文京区の「東京ガーデンパレス」で）

か、なにの学問かは往生の要なるべきや。

まことに、このことわりにまよえらんひとは、いかにもいかにも学問して、本願のむねをしるべきなり。経釈をよみ学すといえども、聖教の本意をこころえざる条、もつとも不便のことなり。

一文不通にして、経釈のゆくじもしらざらんひとの、となえやすからんための名号におわしますゆえに、易行^①という。学問をむねとするは、聖道門^②なり、難行となづく。

あやまって、学問して、名聞^{みようもん}利養^{りよう}のおもいに住するひと、順次^{じゆんし}の往生、いかがあらんずらんといい証文^④もそうろうぞかし。

(原文は、東本願寺発行の『真宗聖典』を参照した)

でも、聖教のほんとうのところが領けないのは、なんとも哀れむべきことである。

学問・知識もなく、經典や注釈書の論理も知らないひとが容易に称えられる南無阿弥陀仏なので、易行という。学問を第一義と考えるのは聖道門であり、難行と名づけるのである。

学問しながら、本来の目的を誤って、富や名声に心をうばわれているひとには、果たして来るべき純粹清浄の生活があり得るだろうか、という証拠の言葉もあるのである。

語 註

①【易行】念仏(南無阿弥陀仏)のこと。如来の本願が一切衆生を救うために選び取った行為。いつでも、どこでも、だれでも行え、救済に努力を必要としないので、「易」という。「序」の語註(『親鸞仏教センター通信』以下、「通信」と略す)創刊号)を参照)

②【聖道門】聖道門は自力・難行道で、この世で悟りを開く道である。「第四条」の語註(『聖道・浄土』「通信」第六号)を参照)

③【難行】「第四条」の語註(『聖道・浄土』「通信」第六号)を参照)

④【証文】仏法の道理をあらわすための証拠となる文章。ここでは、『末燈鈔』第六通(『真宗聖典』六〇三頁)、『一枚起請文』(同九六二頁)等を指す。『往生要集』、『七箇条制誡』にもある文で、もとの出典は『大宝積經』である。

(訳・語註：親鸞仏教センター)

私の二冊

(伊東恵深)

『スモールワールド・ネットワーク
—世界を知るための新科学的思考法—』

ダンカン・ワッツ

(阪急コミュニケーションズ)

現代社会はネットワーク社会である。インターネットなどのコンピュータ・ネットワークに限らず、経済の仕組みから文化の流行に至るまで、私たちを取り巻く生活環境すべてがネットワーク化している。

本書は、一見すると多様なネットワーク社会も、実は「短いチェーンでつながれ(スモールワールド)、互いに影響し合っている(ネットワーク)」現象であること、社会科学の立場から教えている。

この理論は、世界で起こるさまざまな事象に対して新しい連関を与えるだけでなく、個の成立にまで言及する。「個人のアイデンティティ」というものは、自分自身の主観的な自己概念によるのではなく、他者との関係性において社会的に形成される。現代の「つながり」を生きる私たちにとって、ネットワーク理論が示唆する「他者との結合」は、見過ごすことのできない大切な課題を投げかけているのではないだろうか。



『聖典』の試訳（現代語化）

人間救済の原理を第十二条は、簡潔に「本願を信じ、念仏をもうさば仏になる」と表現する。もつと簡潔に言えば、「南無阿弥陀仏」であり、さらに象徴化すれば「南無」（帰命）ということである。この言葉が、われわれの救済の原理であると深くうなずくことを「信」という。別の視座から、親鸞はそれを、「行者のはからいにあらず」（自然法爾）とも表現する。

「知」は、なんのためにあるのかと言え、知自身を超えた事実に見覚めるためである。つまり、非知へと超越するためである。決して、人間の知の蓄積や知の内部に価値をおかない。非知を象徴的に語るためにだけ、知は存在価値をもつ。それは、いわば人間の知を捨てることであり、「知」の死である。しかし、逆に捨てられた知こそが、「信」の象徴性を表現するために復活し、創造的にはたらき始めるのだと思う。

（武田定光）

『歎異抄』試訳〈第十二条〉その1

原文

経釈をよみ学せざるともがら、
往生不定のよしのこと。この
条、すこぶる不足言の義といつ
べし。

他力真実のむねをあかせるもろ
もろの聖教は、本願を信じ、念
仏をもうさば仏になる。そのほ

現代語訳

念仏だけ称えていても、経典や注釈書を学ばないものは、阿弥陀の浄土へ往けるかどうかわからないということについて。これは、まったく論ずるに値しない誤った主張である。

他力真実を説き明かしているさまざまな聖教のころは、「本願を信じ、念仏を称えれば仏になる」ということひとつである。そのほかには、どのような学問が往生にとっての必要条件になるであろうか。ほんとうに、この教えの道筋に迷ってしまうようなひととは、徹底的に学問して、本願のころを知るべきである。経典や注釈書を読んで、学問をしてい

親鸞仏教センターの動き

(2004・12/2005・2)

■2004年

12・1 情報誌『LIFE』第8号、研究誌「現代と親鸞」第7号、機関紙「親鸞仏教センター通信」第12号を発行。

12・3 現代と親鸞の研究会21「アイデンティティとスピリチュアリティ」近現代における探求と現代社会における意味」東京大学大学院教育学研究科助教授・西平直氏（文京区・東京ガールデンパレス）

12・6 第128回研究会（研究・交流・出版等の協議と企画）以降、14回の会議を開催。

第55回英訳「教行信証」研究会
第33回「親鸞思想の解明」連続講座（千代田区・東京国際フォーラム）

12・10 親鸞聖人ご命日のつどい

12・17 第51回「聖典」の試訳「歎異抄」研究会

12・19 第27回清沢満之研究会

12・24 親鸞仏教センター報恩講

■2005年

1・14 親鸞聖人ご命日のつどい

第34回「親鸞思想の解明」連続講座（千代田区・東京国際フォーラム）

1・17 現代と親鸞の研究会22「本当の「豊かさ」とは何か」埼玉大学名誉教授・暉峻淑子氏（文京区・東京ガールデンパレス）

1・19 第28回清沢満之研究会「清沢満之における「他力門哲学」試論」の思想的意義「東京経済大学教授・今村仁司氏（文京区・東京ガールデンパレス）

2・3 第59回英訳「教行信証」研究会「大悲の解釈学」鈴木大拙訳「教行信証」私見「大谷大学教授・安富信哉氏（文京区・東京ガールデンパレス）

2・4 第35回「親鸞思想の解明」連続講座（千代田区・東京国際フォーラム）

3・1 機関紙「親鸞仏教センター通信」第13号を発行。

現代における人間像に学ぶ研究会 ///

森津純子氏にインタビュー

いのちと現代医療

聞き手：藤原正寿（教学研究所研究員、元親鸞仏教センター研究員）

「現代における人間像に学ぶ研究会」は、現代の課題に真摯に取り組んでおられる方々に直接インタビューし、「現代の人間像」を学び、社会から要請されている親鸞仏教の課題を探ろうとするものである。その3回目は、2004年10月4日、ひまわりクリニック院長の森津純子氏を、文京区小石川の診療所に訪ね、お話をうかがった。1997年の開業以来、主にがんの医療相談とカウンセリングを中心に、多くの人の“心の治療”にあたっておられる。ここにその一部を紹介する。

■ 現代医療への疑問

——現代医療では、“スバゲティー状態”とも言われますが、患者さんの身体にたくさんの管を通して治療を行います。先生は、そういう医療のあり方について疑問をもたれた、と著書のなかでおっしゃっておられますね。

森津 そうですね、私が医者になった当時は、すでに管だらけの状態の患者さんが大勢いました。ただ、「本当にこれでいいのかな」という思いは消えませんでした。確かに医者の方々は、「患者さんを治すために管を使うのであって、強い薬も使わなければ治らないんだ」とおっしゃるのです。もちろん、家族の合意に基づいてこの治療方法がとられるわけですが、逆に、人間を早死させることもあるのです。実際に私は、そういうケースをたくさん見てきました。そう考えると、本当に管だらけにすることが医療として正しいのかどうか、という疑問をもたざるを得ませんでした。

例えば、がん治療の場合、抗がん剤の副作用で、のたうち回って痛み、髪の毛は抜け落ち、顔や手足もパンパンに腫れたうえに、出血で紫色になって死んでいきます。現場にいて、とてもつらいと同時に、人間はそんなふうになってまで長生きしたいのか、と思いましたね。



森津 純子（もりつ じゅんこ） ひまわりクリニック院長

1963年、東京都生まれ。筑波大学医学専門群卒業。都立墨東病院、昭和大学病院形成外科等を経て、92年、新潟県長岡西病院ビバーラ病棟（ホスピス）医長に就任。97年、「ひまわりクリニック」を開業。横浜蘇生病院ホスピス科非常勤医師。著書に『母を看取るすべての人へ』（朝日文庫）、「家族が「がん」になったとき真っ先に読む本」（KKベストセラーズ）、「ひまわり先生の元気になる処方せん」（毎日新聞社）、「絶対しあわせに死ぬ方法」（筑摩書房）など多数。

私の診てきた患者さんには、そのように苦しみ、しかも治る人がほとんどいなかったの、結局、死んでいく人間が、なぜそんなにも苦しい思いをしなければならないのかと、とても悩みました。いまの病院では、本当に幸せに死んでいくことはできない。病院は、幸せに死ぬ場所ではないんだ、と。だからこそ、果たして人間が本当に幸せに死んでいける方法があるのだろうか、と真剣に考えました。それで最終的に、ホスピスの道を選んだのです。

——そういう意味では、病院だけでなく、現代社会そのものが、死と真正面に向き合うどころか、むしろ死を避けているというふうに感じられることも多いのではないのでしょうか。

森津 そうですね。死を避けているというよりも、死とか病気は、嫌なもの象徴であっ

て、皆、それを避けてしまっているんですね。医者もそうです。本当は、良いものと悪いものというふうに分けなくて、自分の人生のなかにあるものを丸ごと真正面から受け止めて、「いったい自分とは何か」「自分はどう生きるのか」ということを、静かに見つめていけばいいのだけれども、それが見つめられなくなっています。そのことの象徴が、「死を見ない」ということではないでしょうか。そんな気がしています。

■ 誰のための医療か

——患者さん本人だけではなく、周囲の家族も含めて、治療法の選択に関しては、いろいろな葛藤が生まれてくると思うのですが、先生はそこにカウンセリングの重要な意味があるとお考えのようですね。

森津 葛藤が生まれてくるのは、価値基準をどこに置くかがわからないからではないでしょうか。管だらけになるというのは、判断基準が「長生きできるイコール良いこと」であって、長生きの中身、質ではないんです。だからそれは、どのくらい長く生きられたかという記録への挑戦みたいなことになってしまっています。

ところが、その記録への挑戦というような現在の医療のあり方と、患者さんや周りの人たちの思いとの間には大きなギャップがあったり、まったく別であったりします。一般に、“長生きできれば、とても素晴らしいことだ”ということに、実は皆、踊らされている部分があります。病気になったときに、いったい誰がその事実を引き受けるのかと言えば、患者さん自身が引き受けると同時に、周りにいる人たちとの関わりのなかに、その人の人生もあるわけです。少なくとも主役は医者ではないはずなんです。

にもかかわらず、“管だらけを良し”とするのは、患者さんや家族の人たちが主役の人生であるはずなのに、もしかすると、医者が主役になってしまっていたのではないかという反省も

あります。ですから、カウンセリングが重要だと考えるようになったのは、そういう医療の現状についての反省からでもあるのです。そのあたりを、やはり、もう一度よく見直して考えてみる必要があるのではないのでしょうか。

それから、皆さんあまりなさらないのですが、患者さんを自分のこととして置きかえて考えてみる、ということが大切だと思います。自分が、もし同じような状況に置かれたとき、果たして長生きするために、とても苦しい思いをしてまで、身体じゅうに管を通されたり、手足をベッドに縛られたりしたいかどうかです。そこまでして長生きしたいとお思いでしょうか。私は、機会あるごとに患者さんにお尋ねするのですが、9割の人が「嫌だ」と言いますね。だから、自分がされて嫌なことをなぜ他人にするのかという、そのあたりの感覚がどうもおかしくなっているのではないのでしょうか。

それは同時に、価値観がおかしくなっているのだと思います。世間が「正しい」と言ったら、それに右へ倣え^{なら}なんですね。だから、社会全般のことについても、周りが「これが正しい」と言ったら、本当は疑問を感じたり、自分たちは嫌であっても、周りがそう言うからそれに従うというのは、もしかすると、どんどん間違った、悪い方向に行ってしまうのではないかと考えています。

※森津純子氏のインタビューは、『現代と親鸞』第8号（2005年6月1日号）に掲載予定です。



森津純子氏(左)からお話をうかがう(「ひまわりクリニック」で)

● 英訳『教行信証』研究会報告 ●

〈はたらき〉としての願名

—『教行信証』「行巻」・願名の英訳—

親鸞仏教センター研究員 櫻井智浩



英訳『教行信証』研究会は、月2回の輪読会を行い、随時、検討結果を再吟味する総括研究会、さらに外部からの招聘講師による講義を行っている。前回報告（本紙・第9号）以来、引き続き「行巻」の読解を進めている。

今号では、「行巻」の経文結末まで（『真宗聖典』〈以下、『聖典』と略記〉156～161頁・鈴木大拙師英訳『教行信証』〈以下、『英訳』と略記〉15～20頁）の読解のなかから、研究会の成果の一端を報告する。また、通常の輪読会に加え、2005年2月3日には、東京ガーデンパレス（文京区）において、「大悲の解釈学—鈴木大拙訳『教行信証』私見—」と題して、大谷大学教授の安富信哉氏をお招きした。その詳細については、あらためて研究誌『現代と親鸞』に掲載の予定である。



■ 大胆な表現、確かな理解

—鈴木大拙師の英訳からうかがえるもの—

『英訳』読解を通じて、大拙師の了解を、『教行信証』に学ぶ際の問題提起として受けとめていくという本研究会のスタンスは、「行巻」読解についても同様である。

大拙師が、「誓願」を Prayer 〈祈り〉（く）は、英訳『教行信証』研究会による試訳。以下、同様）、あるいは「行巻」で言えば、「大行」を The great living 〈大いなる生〉と訳すことはあまりにも有名である。しかし、『英訳』を注意深く尋ねていくと、それら以外にも、大胆で、しかも考え抜かれた英語表現が、実は随所に盛り込まれていることに気づく。無

論、それは単に修辭的配慮からだけではなく、大拙師の豊かな大乘仏教理解と確かな仏道の歩みが、自ずとその文面にあらわれ出たのだと感じられる。その一例を紹介しよう。

■ 「行巻」の願名

—「教巻」「大経」引文の課題に照らして—

前回（本紙・第9号）報告したように、「教巻」の『大無量寿経』、ならびに『平等覚経』『無量寿如来会』の引文の英訳から、出世本懐における、釈尊と諸仏、仏と衆生との呼応関係を確認した。今回取りあげる「行巻」の願名（『聖典』157頁・『英訳』15頁）の英訳にも、阿弥陀仏と諸仏の関係をめぐって、大拙師ならではの理解と表現が確認される。

「行巻」冒頭は、往相回向を、大行と大信とに開き、大行とは何かが述べられる。そして、『大経』の第十七願が「大悲の願」と押さえられた上で、次の5つの願名が並べられている。

ここに、『聖典』の文言（願名）と英訳、その日本語試訳を対応させて掲げてみる。

(1) 諸仏称揚の願—the Prayer is known as that which is praised by all Buddhas 〈あらゆる仏によって賞賛される祈り〉

(2) 諸仏称名の願—[the Prayer is known] that in which all Buddhas pronounce the Name 〈その祈りにおいてあらゆる仏が御名を発する—そういう祈り〉

(3) 諸仏咨嗟の願—[the Prayer is known] as that which is heartily applauded by all Buddhas 〈あらゆる仏によって心から喝采されるような祈り〉

(4) 往相回向の願—the Prayer of outgoing ekō 〈外へ向かう『回向』の祈り〉

(5) 選択^{せんじやく}称名の願—the Prayer in which the pronouncing of the Name is given preference 〈その祈りにおいて御名を発することが選ばれる—そういう祈り〉

(1) から (3) は、第十七願の願文によって名づけられた通浄土教的表現であり、一般的には、その意味はほぼ同じく、「諸仏が御名をほめたたえる願」の名が並記されたものと解されている(星野元豊『講解 教行信証 教の巻 行の巻』法蔵館、90頁)。一方、(4)、(5) は宗祖独自の願名とされる。これらの願名の英訳に、大拙師はかなり腐心されたと感じられる。

以上のように、一見、煩瑣で日本語に返しにくい英語構文で表現されているのはなぜか。

■「称揚」「咨嗟」と「称名」

この5つの願名を見比べると、ある事実にくづく。それは、諸仏による阿弥陀仏に対する「称揚^{しょうよう}」「咨嗟^{ししや}」の願と、諸仏による「称名」の願(いうまでもなく、阿弥陀仏の「名」である)の違いである。

英訳では、(1)、(3) については、「諸仏が弥陀の本願をほめたたえる」という文脈である。つまり、「本願」は、諸仏の「ほめたたえ」の目的語である。一方、(2)、(5) は、「諸仏が阿弥陀仏の名を称えるのだが、それを弥陀の本願が成立させるのだ」という構造である。つまり、こちらでは、「本願」は「諸仏称名」の主体、つまり、諸仏にはたらきかける因である。

また、諸仏の行に着目すると、「称揚」「咨嗟」は受動態(“praised/applauded”)で表現される一方、後の二者の「称名」は能動態(“pronounce/pronouncing”)で表現されている。そして、「選択称名」の「選択」はまた、受動態(“given preference”)であり、動作主は特定されておらず、それによって法蔵願心が諸仏、衆生に開かれる契機が暗示されていると考えられる。

以上が、the Prayer、つまり第十七願一つのはたらきとして押さえられている。このような大拙師の本願の表現は、次のように整理できるであろうか。——まさに弥陀の本願にうながされて、諸仏が自ら弥陀の名を称え、諸仏によってその本願はほめたたえられる。そういうかたちで御名が選び取られる。それが、第十七願である——この解釈について、意見はさまざまであろうが、一つ言えることは、一見、それぞれに独立した、辞書の見出し語の羅列のようにも見える5つの願名が、大拙師の英訳においては、一つの本願のさまざまなはたらきのあらわれとして、つながりをもって表現されているということである。

■「踊躍歡喜」

坂東性純師は、『英訳』とほぼ同時期の英語による講義録について、「本書に含まれるどの章からも、晩年の大拙の円熟した境涯が、自由自在に用いられている流麗な英文の上に感じ取られる」(『神秘主義 キリスト教と仏教』岩波書店、308頁)と述懐されている。この評価は、そのまま『英訳』にもあてはまる。「行巻」の經典引文には、くり返し「踊躍歡喜^{うどくく}」の語があらわれるが、その心持ちは、まさに「自由自在」なるものであろう。弥陀の本願に触れる、諸仏国土の衆生の「踊躍歡喜」、その生き生きとした同じ精神の力を、大拙師の英訳にも感じる。

もちろん、出版後30余年を経て、『教行信証』の定本の出版、仏教学の新たな知見の蓄積や、社会状況の変化にともなう言語表現などによって、注記、また表記の統一などの必要を感じる箇所がないわけではない。その点には留意せねばならないが、それを差し引いても、言葉にならないものを言葉にする困難な仕事を、大拙師は果たされている。

『英訳』に触れ、師の「踊躍歡喜」が、師なき後も、今ここにはたらいっている感がある。

第 2 回「親鸞思想の解明」シンポジウムを開催 (2004年11月 5 日)

親鸞仏教センターでは、設立以来、毎月 1 回、東京国際フォーラム (有楽町) を会場に、連続講座「親鸞思想の解明」(テーマ: 浄土一濁世 (じょくせ) を超えて、濁世に立つ) を開いている。第 32 回の講座では、一昨年開催の第 1 回シンポジウム「科学技術文明と現代の不安」(2003 年 10 月開催) において提起された、「近代的知がはらむ問題性と、それを照らし出すものとしての宗教の意義」を受けて、「科学技術文明と現代の不安 2—知によって覆い隠された世界と宗教」をテーマに、第 2 回「親鸞思想の解明」シンポジウムを開催した。

基調講演に前回のパネリストである下田正弘氏 (仏教学者・東京大学大学院助教授) を、パネリストに菅原伸郎氏 (元朝日新聞記者・東京経済大学非常勤講師) を迎え、本多弘之所長を交えて、有識者やサラリーマンなど約 100 名の参加者と共に、3 時間半にわたって熱心な討議がなされた。

基調講演では、下田氏 (=写真上) から、まず「科学と宗教は対話が可能かどうか、あるいは、いかに対話すべきか」という問題を考えるとき、科学と宗教が分けて考えられるようになる前、つまり「知る」という行為が出る以前に立ち戻らなくてはならない」と述べられ、対話以前のもつ意味の重要性を指摘された。その一例として、「技術」と「呪術」(現在の「科学」と「宗教」の祖先) を提示され、「古代において、両者は、離れたものに対して自分の力を及ぼす」という意味で、起源を同じくしていた。しかし、技術は、時代の進展と共に、試行錯誤の結果を経験として改良され続け、やがて科学として成立していくのに対して、呪術は変化することなく原初の姿を温存していく。このように技術と呪術は、現代から見ると、別々のもののように考えられている」と述べ、その原因は、「人間の意識作用、つまり「知る」「蓄積する」という世界が生じてくることによるからである。しかし、知ることによって得た世界は事実そのものではなく、その虚構が、宗教体験を通して破られるときに、知によって覆われた本当の世界が見えてくるのではないかと、意義深い問題提起をいただいた。

続いて、パネリストの菅原氏 (=写真中) からは、基調講演を受けて、「現代の問題は、仏教で「分別 (ぶんべつ)」と表現されてきた人間の知性・知識が世界を覆っており、「無分別の分別」と言われる、人間の分別を超えた仏教の智慧が見えなくなっていることである」と語られた。さらに教育問題に触れ、「現代の教育の現場に、「無分別の分別」の世界が広く開かれることが大切である」と提言がなされた。

最後に、本多所長は、「人間存在が根にもっている所有欲は、経験や知識を全部蓄積し、その延長上に文明社会をつくってきた。しかし、人間は本来、知識や文明を蓄積するという所有欲ではない、涅槃をくぐってあきらかになる大切なものを求めている。そのことに目覚めていく方向が宗教であり、そこに、この濁世を場として、有限な生命を引き受けて生きるという信念が開けるのではないか」と述べた。

引き続き開催されたパネルディスカッション (=写真下) では、休憩中に寄せられた聴講者からの質問や、約 10 名の助言者からの提言から、緊張感のある議論が展開された。就中、前回、基調講演をいただいた物理学者の國府田隆夫氏から、「現在、心ある人のなかには、物理学や生物学でも、本質的なところで限界に近づいているという見方がなされており、本当の意味で、対話の機が熟してきているのではないかと」の意見が述べられ、科学と宗教の対話が成り立つ場が継続して確かめられていくことの重要性が再確認された。

科学技術文明と現代の不安を生きるなかで、科学と宗教の対話がどこで成り立つのか、また、いま宗教に求められていることは何かなど、これからも「現代の課題」と「親鸞の思想」との接点を明らかにしつつ、課題の共有をめざした取り組みが願われている。



あ と が き

親鸞仏教センター研究員の藤原正寿氏が、2004 年 11 月 10 日付で真宗大谷派教学研究所研究員に就いた。そして、嘱託研究員の新田智通氏 (元東京大学大学院) が、同年 10 月 1 日付で東方仏教徒教会 (EBS・大谷大学内) で活躍されることとなった。新しい場でも、「現代の課題」と対峙しつつ、時代関心の言葉で「親鸞思想」を発信していただきたいと心から念じている。海外の読者 (ニューヨーク在住・銀行勤務) からお便りをいただいた。「社会人になって、半分以上の 15 年間は海外で過ごし、いまは三度目のニューヨーク勤務です。日本もバブル経済崩壊から 10 年以上もかかり、やっと経済状況も向上し加減になってきた様子ですが、10 年前のオウム真理教の重大事件以来、日本の世相は悪化の一途を辿り、近時はますます凶悪化してきたようにもかえります。海外から、『美しい世界一安全な日本・勤勉で親切的日本人』と、長く言い伝えられてきた評価はどこへ行ってしまったのでしょうか。何がそのような影響をもたらしたのでしょうか。私の住むニューヨークはこの 10 年で、その昔からは想像がでないくらい、街は安全で美しく暮りました。この日米のずれの違いを簡単に説明できませんが、私は、自国の文化に誇りをもつ心の差を、日米間で非常に感じるひとりで、昨年は、黒船来航で鎖国を解いて結ばれた日米通商条約から 150 年目、日露戦争終結から 100 年目、そして今年は、第二次大戦終結から 60 年目に当たる節目の年です。15 年前のソ連崩壊までつながった旧東欧での民族自決運動、パレスチナ問題、イスラム・中国・韓国、どこの国・地域でも、自国の文化に収斂 (しゅうれん) していく動きが見られます。外からは、ひとり日本だけがその例外に見えます。海外にいて、日本の世相を垣間見ますと、親や日上的方への礼節、障害をもつ方々への思いやり、自国文化への誇りなどが、海外における一般的な水準に比べ、著しく劣っているのではないかと、それは初等教育にも問題があるのではないかと、宗教の教えもきちんとした生活教育の上にしか成り立たないのではないかと、などと感じます。いま日本でも、すべての教育の原点になっている教育基本法の改定が問題になっていますが、広く国民的議論が展開されることを期待しています」(要旨) と。示唆にとむ意見である。親鸞思想から現代の課題を問い、時代関心の言葉で親鸞思想を発信するという願いが、より明確になったように思う。▼あらためて東京という場の意味を考えると、国際交流の問題を抜きには語れない。日本を知るためにも、そして自己を知るためにも。

(長谷岡)

「アンジャリの会」(anjali, 個人購読) 入会のご案内

「アンジャリの会」は、親鸞仏教に親しみ、共に学んでいこうとする人たちの会です。入会者には、「anjalī」(年 2 回)、「親鸞仏教センター通信」(年 4 回) をお送りします。

◆年会費 (送料込) 1,000 円

◆申し込みと問い合わせ

〒、住所、氏名、電話番号を明記のうえ、ハガキ、FAX、Eメールのいずれかで、下記までお申し込みください。

〒113-0023 東京都文京区向丘 1-13-7
親鸞仏教センター内「アンジャリの会」T係
TEL 03-3814-4900
FAX 03-3814-4901
E-mail shinran-bc@tomo-net.or.jp

親鸞仏教センターホームページ

<http://www.shinran-bc.tomo-net.or.jp>

— 親鸞からあなたへのメッセージ —